-142 參照)。されどまた昔羅布の位置が尙東方に偏せしと共に、此河も尙東に流れたるものにして、今日土人がクムダリア (Kum-daria 砂河) と稱する乾河は其當時の河床を示すものなりとは、曾てコスロフ (Kosloff) 氏が唱へ、ヘディン氏等も亦同ずる所なり。今若し其發掘の地點を詳らかに知るを得ば、此當時の羅布泊の位置を略ぼ推定し得べしとなすもの、もとより余一人の偏見にはあらざるべし。何となれば此文書は既に上に述べたる如き性質のものにして、當時に於ては一片の反古にすぎず。之を李柏一行が駐屯したる行營に遺留したるにすぎざる可ければ、其地は卽ち當時の海頭にして、泊の附近なるべきは略ぼ疑を容れざるべし。もとより泊の位置、廣狹の變遷は明かに之を認むべきが故に、必らずしも今日の位置と適合するものにはあらずと雖、然も少くとも其當時の狀態を知り、また以て今日の異論を確むるの一材料たるを得べし。只だ今橘氏亦去りて流沙の間に遊び、其埋沒の地點が此河の何れの邊なるやを精確に知る能はざるを憾みとす。氏が歸來委曲を語るの日は、思ふにヘディン氏等の說が更に有力なる史料を以て確かめらるゝ日なるべし。

更にまた之によりて考がふべきものあり。唐書焉耆傳に曰く、「太宗貞觀六年、其王龍突騎支、始遣使來朝、自隋亂磧路閉、故西域朝貢皆道高昌、突騎支請開大磧道以便行人、帝許之、高昌怒大掠其邊」と。抑も支那を西に出でゝ西域に向ふには、漢代既に南北の兩路ありて、今日天山南路と稱するものは、卽ち大體に於て古への北道に外ならざることは、一般に知悉せらるゝ所なりとす。而して此道は今日安西より北西の方面を取り、流沙を踰えて哈密 (Khami) に到り、天山の南を迚りて闢展 (Pitchen) 魯古沁 (Luktchin) 吐魯番 (Turfan) 等を經て、哈喇沙爾卽ち古への焉耆に出づるものにして、後漢書西域傳に「自敦煌西出玉門陽關、涉鄯善、北通伊吾、千餘里、自